

大いちょう

令和6年9月13日
岐阜市立加納幼稚園
園長 藤井 佐由美

2学期が始まり、2週間が経ちました。子どもたちは、午前中のほんの少し暑さが柔らかい時間帯に戸外に出て、元気よく体を動かして遊んでいます。5歳児は、遊戯室や戸外で、いろいろなリレー遊び（思い切り走るリレーや雑巾がけ玉集めリレー、玉入れフープ取りリレー等）を楽しんでいます。4歳児は、清水川の生き物と関わる中で岐阜市役所環境保全課自然係との交流があり、遊びの中の学びの多い日々を過ごしています。3歳児は、1学期に楽しんできた警察ごっこやお姫様ごっこ、マリオごっこ、乗り物ごっこなどを繰り返したり、戸外で砂や水、草花を使ってごちそうづくりを楽しんだりしています。

お知らせとお願い

◆3・4歳児の遠足について

4歳児は、1学期から清水川の生き物にふれ、親しんできました。きっかけは、1学期に散歩に出かけた清水川にはたくさんの自然があることに気付いたことです。虫や鳥、花や木、そして川の中には大きな鯉や小さな魚がいることを発見しました。子どもたちは、川を見ているうちに「魚を捕まえてみたい…」と思うようになりましたが、子どもたちに簡単に捕まるような魚たちでもありません。そこで、幼児教育課の魚が好きな先生にお願いして、清水川の魚を捕まえてもらってきました。自分たちの保育室に魚の入った水槽がやってきたことで子どもたちは大喜びでした。毎日、少しずつ餌をやり、気温の上昇により水温が上がると、「お風呂みたいに熱くなっちゃった！！」と言って、ペットボトルに水を入れたものを凍らせて水槽に入れていました。私たち教師は、魚を飼育することで、水の中の生き物に愛情が湧きつつある子どもたちに、何とか自分たちで捕まえさせてやりたいと策を練りましたが、4歳児の子どもたちが清水川に入るのには、やっぱり危険が伴うだろう…ということで、みなでもう一度清水川に出かけて、「先生が代表で川に入って捕る」ということになりました。子どもたちが、橋の下の日陰で一生懸命エールを送る中、たんぼぼ組の担任が、川の中に入って苦戦しながら網で魚を捕まえてくれました。捕まえたのは、「メダカ」と「タモロコ」「ヌマエビ」でした。子どもたちは、目の前で先生が捕まえた魚の登場に心が躍りました。バケツの中で元気よく泳ぐ魚をところ狭しと頭を寄せて見合っていました。そして、幼稚園に連れて帰って水槽に入れ、満足そうに眺めており、ますます魚に興味をもつ子どもが増えていきました。

その後も、ヌマエビがボイルされてお亡くなりになったりして、嬉しい気持ちも悲しい気持ちも味わい、いろいろな経験を経て、夏休みに入りました。保育室にあった水槽は、少しでもクーラーの効いた部屋がよいだらうと職員室に移され、夏休み中は大人の手で大切に飼育されていました。夏休み中に、たんぼぼ組の担任がいろいろと教材研究を重ね、罟を仕掛けて魚を捕る方法を見つけました。「これなら、4歳児の子どもたちでも楽しんでできそうだね。」ということになり、2学期が始まってすぐ、子どもたちと一緒に魚を捕る罟作りが始まりました。子どもたちは、自分たちが作った罟にどんな餌をいれよう

かとワクワクしながら考えました。お家で保護者の方と相談してくる子どももいました。実際に餌を持ってきてくれる子どももいました。子どもたちとの話し合い（サークルタイム）の中で、「ミミズやいちごポッキー、抹茶のクッキー、チキンラーメン、チョコ、ちくわ、ピーマン、ソーセージ、ブドウ、モモ、コーヒー豆などなど…」いろいろなアイデアが出ました。子どもの発想は実に面白く、結果はやってみなくちゃわからない…ということで、翌日、子どもたちがお家から持ってきた餌を含めて、13～15個くらいの罠を仕掛けました。今回は、「自分たちで作った罠と自分たちで考えた餌」であることが、子どもたちの興味を惹きつけ、長い時間静かに待つこともできました。

この結果の面白かったこと！！まさに、大人にも予想もつかない結果となりました。1回目の挑戦では、なんと「チーズに、オイカワとタモロコ」、「コーヒー豆とカカオニブに、大きなオタマジャクシ」、そして、2回目の挑戦では「かっぱえびせんに小さな魚」、「魚肉ソーセージとポークソーセージにもタモロコ」という結果でした。1回目は、グルメな生き物だったんですかね…2回目は、共食いに近いものが…そんな専門家もびっくりするような結果でした。

翌週には、環境保全課との交流を控えていたとき、魚の話題で盛り上がる中、捕まえてきたオタマジャクシを調べてみると、「ウシガエル」であることが判明しました。「ウシガエル」は特定外来生物に指定されており、生態系を狂わす生き物であることから、殺処分する必要があることが分かってきました。環境保全課の方に教えてもらう前には、教師も「最後まで飼育し続けるのであれば飼うことができる」と思っていました。子どもたちとの話し合い（サークルタイム）でも、「そんなに他の生き物を食べちゃうんなら、殺しちゃった方がいい。」という意見もあれば、「やっとな（自分たちで罠を仕掛けて）捕まえたんだし、飼いたい。」という意見もありました。中には、そこまでウシガエルに愛情をもって考える子どもばかりでもなく、少しずつ興味がわいている途中の子どももいました。でも、みんなで考えることで、少しずつ自分事として考える機会にしたいと思い、折に触れて子どもたちから考えを引き出すようにしました。そして、環境保全課との交流を迎え、衝撃的なことが分かったのです。「アメリカザリガニとミシシippアカミミガメ以外の特定外来生物は、飼育すること自体が犯罪にあたる」ということです。「ウシガエル」は飼育できない…という現実を知りました。一方、「研究などに活用するために、特別な許可をもらえば飼育ができる。」という特例を知り、「許可をもらって飼います。」と何度も訴える子どももいました。しかし、環境保全課の方のお話では、「環境庁等に許可をもらわないと難しいね…」ということで、子どもたちは、究極の決断を迫られることとなりました。でも、私たち教師は、子どもたちにどんな経験をさせたいのか（その目的）を大切に考えており、「専門家に聞いたからすぐにその通りにするのが良い」という通り一遍の答えではなく、専門家に聞いた上で、子どもたちが十分に思いを出し合うべきだと思いました。このプロセスに大きな意味が含まれていると考えています。教師間でも、「ウシガエルのオタマジャクシについてどう考えるか…」について、大人会議を開き話し合いをしました。やはり大人同士でも意見はまとまりません。でも、こうやって一つの命について一人一人が自分事として考える過程が大切なんだと思います。子どもたちは、環境保全課との交流直後には、「そんなに他の生き物を食べてしまうなら殺してしまえばいい。」と言う子どもが多くいました。しかし、日が経つにつれ、「（ウシガエルのオタマジャクシの気持ちは？）」に対して、「悲しい気持ち…」、「まだ小さいからかわいそう…」、「死ぬまで生きてほしい。」「カエルになるまでの成長を見たい。」など、何とかして殺処分する以外の方法をとりたい子どもが増えていきました。正しい答えを探しているわけではありません。既に生態系の在来種を守るためには、殺処分が決まっているウシガエルのオタマジャクシです。子どもたちも先生たちも、その現実に対してどう経験するのかを大切に考えているわけです。子どもたちも先生たちもとても貴重な体験をしている最中です。

長々とエピソードを綴らせていただきましたが、ここからが本題です。

3歳児、4歳児の遠足の行き先について、4歳児の子どもたちと共に相談した結果、『アクア・トトぎふ』に決定しました。昨年度までは、『長良公園』に行っていましたが、これだけ水の中の生き物に興味を持ち始めている子どもたちを見ると、どうしても『アクア・トトぎふ』に連れて行ってやりたいと思ってしまうのです。3歳児の子どもにとっては、遠足で『アクア・トトぎふ』に出かけることで、4歳児になったときの清水川での活動がより楽しいものになるはずです。

保護者の皆様、どうか3歳児・4歳児の子どもたちを『アクア・トト岐阜』に連れて行っていただけないでしょうか。心からお願い申し上げます。

5歳児の子どもたちには、「挑戦する気持ち」や「頑張り抜く気持ち」を経験してほしいと願っていますので、予定通り、『金華山』に出かけます。こちらも送迎をよろしく願いいたします。

詳しくは、後日、配信されますお便りをよくご覧ください。

◆5歳児の運動会競技について

いきなり本題から入ります。5歳児の毎年恒例の運動会競技「ろくぼくジャンプ」についてですが、結論的には、「ろくぼくジャンプ」はやめようということになりました。理由は二つです。

一つ目は、「ろくぼくの本来の使い方は登ったり下りたりするものであり、天板から跳び下りるために作られた体育用具ではないこと。そのため、天板はとて幅が狭く、十数cmの上に立ち上がることの危険性がとてつもなく大きいこと」

二つ目は、「子どもの運動発達の過程から見て適していないこと。そのため、成功すれば安全に見えるかもしれませんが、ろくぼくの頂上から後ろに転落したときのことを想像すると、重篤な怪我（時には一生治らないような怪我に至る）につながる危険性があること」

このことを受けて教師間で、ろくぼくジャンプに代わる競技をどうするとよいのかを話し合ってきました。「ろくぼくジャンプ」を通して、私たちは子どもたちにどんなことを経験させたいのかを出し合ったとき、「あのジャンプをやり切ると、ひとつ大きくなったような喜びを味わえる。」「ドキドキするけど、飛べたときの達成感が大きい。」「ひとつの大きな壁を乗り越えていく経験をさせたい。」などの意見が出ました。そこで、「どんなものなら、その目的を経験することができるだろうか。」と話し合い、「鉄棒で難易度を変えて挑戦するのはどうか。」「子どもによってレベルを選択させながら、ストライダーや補助輪なし自転車、一輪車なんかは楽しんで挑戦できるかも…」「フラフープとか…」「縄跳びとか?」「大縄跳び?」など、いろいろアイデアを出し合いました。でも、やっぱりしっくりいきません。「ろくぼくジャンプって、きっと『ダンプえんちょう、やっつけた!!』という絵本に出てくる『さくらちゃん』の心情なんだよね。何かの技術を磨くのは違って、気持ちを強く持つ、勇気とか、やる気とか、自分ならできるっていう気持ちとか…そのうち、それを克服した子どもたちが自分が味わったときの気持ちと重ねながら、挑戦し続けている他の子どもの応援をしたり、見守ったりする…そういう気持ちの部分が大きい競技なんだよね。だから、できないことを繰り返し練習して技術を身に着けるものとは質が違うよね。」という結論に至りました。

ということで、高いところから跳び下りたいという子どもの挑戦欲みたいなものは叶えてあげたいので、安全に留意して「静と動」の両方が経験できるような競技にしていきます。今、実践しながら子どもと共に創り上げている途中ですので、当日または、運動会ウィークなどで、ご覧ください。どうぞ、ご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。